

(13)昭和60年の防除上特に注意すべき病害虫

中央農業試験場 病虫部

本成績は、昭和59年に各農試農業改良課及び各病害虫防除所が実施した発生予察事業ならびに試験研究の結果から主要病害虫の発生状況と新発生病害虫を総括し、さらに60年の防除上特に注意を要する病害虫について取りまとめたものである。

昭和59年の主要病害虫発生状況(平年対比、病害虫の種類数で示す)

作物名	少発生		並発生		多発生		作物名	少発生		並発生		多発生	
	病害	虫害	病害	虫害	病害	虫害		虫害	病害	虫害	病害	虫害	病害
水稻	8	8	2	1	2	4	ニンジン	0	1	2	3	1	0
小麦	7	3	0	1	2	1	ダイコン	0	0	2	5	2	1
大麦	4	3	0	1	0	0	ハクサイ	0	0	4	4	2	0
とうもろこし	4	1	0	2	1	3	キャベツ	1	0	1	2	2	2
大豆	7	4	0	3	0	2	トマト	10	0	0	1	1	2
小豆	7	1	1	2	1	5	ナス	4	2	0	1	0	1
菜豆	7	1	0	3	1	1	キュウリ	6	0	2	1	1	2
馬鈴しょ	6	1	2	5	3	1	スイカ	4	0	0	0	0	2
てん菜	6	1	2	3	1	3	メロン	4	0	2	0	0	2
リンゴ	5	2	1	2	1	2	イチゴ	4	0	1	2	0	0
タマネギ	3	3	0	0	1	1	牧草	12	0	3	1	2	2
ネギ	2	2	1	0	0	1	計	111	33	26	43	24	38
											合計		275

昭和59年に新たに発生または命名された病害虫

- えん豆 こうがい毛かび病(新発生)*Choanephora cucurbitarum* Thaxter (中央農試)
昭和59年8月、鶴川町で、茎、葉、莢に白色綿毛状のかびが密生し、商品価値低下。
- えん豆 黒点症状(仮称)*Leptosphaerulina* sp. (中央農試)
昭和59年7月、鶴川町で、茎、葉、莢に1mm以下の、黒褐色小斑点が密生し、商品価値低下。
- ダイコン 黒しみ病(仮称)*Cylindrocarpon destructans* Scholten (中央農試, 北大農)
昭和58年2月、59年2月、長沼町産の貯蔵中のものに発生、収穫時は病斑なし、1月頃から大根の側根基部から皮目に沿って黒褐色斑点が生じ、のち拡大して中心部が陥没して輪紋状となり、3月末には肉質部まで褐変が進む。
- ハクサイ スジブトホコリダニ(新寄主)*Tarsonemus bilobatus* Suski (中央農試)
昭和59年3月、旭川市でハウス内の幼苗の葉がそり、硬く、光沢を帯び奇形となる症状が発生した。スイカ、メロンにも寄生する。体長約0.2mm。
- ハウレンソウ 根腐病(新発生)*Aphanomyces cochlioides* Drechsler (中央農試)
昭和59年7月、札幌市の露地、ハウス栽培の生育中、後期に、葉部が萎凋黄化し、地際の根がはじめ水浸状、のち黒褐変し細くなって切れる症状が発生。現地でカマイラズと呼んでいる。
- トウガラシ、白斑病(新発生)*Stemphylium lycopersici* Yamamoto (中央農試)

ピーマン、シシトウ	昭和59年4月、千歳市でハウスの幼苗の葉に2～3mmの淡褐色斑点が発生。	
カボチャ	マキバメクラガメ(新寄主) <i>Lygus disponi</i> Linnavuori 昭和59年8月、佐呂間町で収穫時の果皮が径3～15mm、高さ2～5mmに膨隆したこぶ状が発生し、さらに刺傷痕ややにも見られ、青果用として販売不能。成幼虫の吸汁による。	(北見農試)
チモシー	かさ枯病(新発生) <i>Pseudomonas syringae</i> pv. <i>atropurpurea</i> Young,Dye&Wilkie 昭和57、58、59年に訓子府町で発生。葉に水浸状斑点が生じ、のち褐色条斑となる。病斑周囲に黄緑色の暈ができ、病斑部に透明で薄い菌塊が生じ、病斑は葉先まで伸長して巻葉枯死する。	(北見農試)
オーチャードグラス	条斑病(新称) <i>Cephalosporium gramineum</i> Nisikado et Ikata 昭和59年6月、長沼町、厚真町で発生。褐色の幅1mmの条斑が葉鞘から葉身へ連続する。	(中央農試)
トールフェスク	冠さび病(新発生) <i>Puccinia coronata</i> Corda var. <i>coronata</i> 昭和59年秋季に札幌市、伊達市で、葉、葉鞘、稈に橙黄色、楕円形の病斑(夏孢子堆)発生。	(北農試)

昭和60年の防除上特に注意を要する病害虫

作物名	病害虫名	昭和59年の発生		昭和60年の防除上の注意事項または要点
		概評	主要因または知見	
水稲	墨黒穂病	局発	農期間の高温経過	健全種籾の使用、種籾の厳選、種籾消毒
	ヒメトビウソ(縞葉枯病)	多	6～8月の高温多照少雨経過が産卵活動及び増殖に好適。本種は縞葉枯病を媒介	畦畔、苗床、本田、路傍など総合的、地域ぐるみの防除対策。病株の早期採取処分。
	アカヒゲホソミドリメクラガメ(斑点米)	やや多	転換畑の小麦、イネ科牧草で本種の発生密度高。6～8月の高温多照少雨が本種の発生増殖と活動に好適。稲の早期登熟による割籾の多発傾向が本種の加害活動に好適。薬剤防除の早期切上と散布薬量の不足が本種の加害防止に不十分。本種は斑点米の発現虫。	本種の生息場所である転換畑の小麦、イネ科牧草、及び畦畔や路傍などのイネ科雑草地での発生動向を把握し、発生実態と稲の生育状況を考慮した適正防除が大切。
小麦	条斑病	やや多	汚染種子の使用、種子消毒実施率の不備、病菌密度の増加、前年輕症畑での連作	健全種子の使用、種子消毒、輪作、畑清掃、病株早期採取、発生畑の麦稈処理と夏季完全反転耕
大豆・小豆	ツメクサガ	多	6～8月の高温経過が産卵活動と幼虫歩止まりに好適	幼虫の早期発見、若～中令幼虫時の薬剤散布
小豆・えん豆・タマネギ・アスパラガスなど	アザミウマ類	やや多～多	6～8月の高温多照少雨乾燥経過が発生、増殖に好適	早期発見早期防除
馬鈴しょ・野菜など	アブラムシ類	やや多	6～8月の高温多照経過と干ばつ傾向力発生増殖に好適。アブラムシはウイルス病を媒介	早期発見薬剤の十分量な散布

てん菜	そう根病	並 (局多)	育苗時感染による病苗の持込、既に汚染された畑での作付、病原密度の増加傾向	無病の育苗土、育苗床の使用または土壌消毒、適正な育苗管理、輪作、畑の適性pH維持、汚染畑ではpH低下と土壌消毒を併用して移植栽培、汚染土壌の拡散防止
ホウレンソウ	斑点病	局発	昭和58年に新発見された。	被害茎葉の処分、輪作
ピーマン	モザイク病	多	TMVの汚染種子、「エース」で多発	無毒種子使用、土壌消毒、輪作、弱毒ウイルスTMV-Pa18の利用
アルファルファ	パーティシリウム萎凋病	局多	病原密度増加傾向、栽培品種はすべて感受性	抵抗性品種の緊急な導入、試作

[目次へ戻る](#)